



日本の国土は、亜寒帯から亜熱帯にまたがる大小の島々からなり、そこには屈曲に富んだ海岸線と起伏の多い山岳など変化に富んだ地形や各地の気候風土に育まれた多様な動植物相が見られます。

「モニタリングサイト 1000」では、このような日本列島の多様な生態系を、高山帯、森林・草原、里地、湖沼、湿原沿岸・浅海域、小島嶼に分け、あわせて 1000 か所程度のモニタリングサイトを設置しており、2003 年度より調査を実施しています。基礎的な環境情報の収集を長期にわたって継続することで、日本の自然環境の質的・量的な劣化を早期に把握し、得られた成果を保全施策や学術研究に活用することを目的としています。

森林・草原のモニタリングでは、樹木を長期的な環境変化の指標として、地表徘徊性昆虫を短期的な環境変化の指標として、鳥類を広域的な環境変化の指標として取り上げ、20 のコアサイト、28 の準コアサイト、約 420 の一般サイトで調査を行なっています。

- ・コアサイト： 毎年調査を行ない、毎木調査、落葉落枝・落下種子調査、地表徘徊性甲虫調査、鳥類調査を実施
- ・準コアサイト： 5 年に一度(一部は毎年)調査を行ない、毎木調査、鳥類調査を実施
- ・一般サイト： 5 年に一度調査を行ない、鳥類調査を実施

鳥類調査では、各サイトに 5 か所の定点を設置し、繁殖期と越冬期にそれぞれ 2 日間かけて 4 回(1 地点 1 回あたり 10 分間)、周囲に生息している鳥類の個体数調査を実施しています。

「陸生鳥類調査情報」は、結果の速報や関連情報をお知らせするために、2009 年より毎年 2 回発行しています。バックナンバーは以下よりご覧いただくことが出来ます。

<http://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/newsflash/index.html>

モニタリングサイト1000

陸生鳥類調査 情報

2019年 2月号 Vol. 10 No. 2

Bombycilla japonica
Photo by Yasuyuki Ono

結果速報

モニタリングサイト1000 2018年度繁殖期 一般サイト結果速報 森本 元（日本野鳥の会）

全国約1,000ヶ所のモニタリングサイトのうち、森林・草原の一般サイトは約420ヶ所を占める重要な分野です。調査には、多くの市民調査員のみなさまにご協力いただいております。森林・草原の一般サイトでは、概ね5年に1度、陸生鳥類調査（繁殖期および越冬期）および植生概況調査（繁殖期のみに実施）を行っています。2018年度の繁殖期は、調査を86サイト（森林69サイト・草原17サイト）にお願いしました。そのうち、調査を実施できなかったサイトなどを除き、現時点でデータが集まり集計が完了している森林58サイト、草原14サイトの計72サイトのデータを用いて、中間報告いたします。

記録された鳥類(2018年度)

合計141種（森林107種・草原103種）の鳥類が確認されました。これは昨年の140種とほぼ同数でした。調査サイト数の多い森林サイトについて比較してみると、今年は昨年とほぼ同等の調査地点数で、出現種数は昨年と同じでした。現時点の結果からは、今年の出現種数は平年並といえそうです。

出現率と優占度

次に、森林における出現率（種の出現サイト数÷調査サイト数×100）と優占度（サイトでのある種の個体数÷総個体数×100を平均したもの）を表1、2に示しました。今年の上位種の種構成を、第2期5年間全体（2008-2012年度）と5年前の上位種構成の結果と比べて、検討してみました。モニタリングサイト1000の調査は、前述のように5年を1期として行っていますので、5年前の調査サイトは今回の調査サイトと大半（半分以上）が同じ場所です。調査の都合で、必ず5年ごとに同一地点の調査を実施というわけにはいかず6年前というような地点もあるのですが、多くの地点では前回の調査が5年前だったのでほぼ同じ場所での経年変化を知るための比較が可能になります。そして、これまでの調査成果から、ある年の結果と5年前の結果は、上位種の構成や順位がとても似ていることがわかっています。実際、今年（表1）と5年前（表3）の種構成はほぼ同じです。そして、例年の傾向としてトップ10の下位グループに入る種の順位

表 1. 2018年度繁殖期の出現率の上位10種

a) 森林 (n = 58)			b) 草原 (n = 14)		
順位	種名	出現率	順位	種名	出現率
1	ウグイス	93.1	1	ハシブトガラス	92.9
1	ヒヨドリ	93.1	2	ウグイス	85.7
3	キビタキ	89.7	2	キジバト	85.7
3	ハシブトガラス	89.7	2	ハシボソガラス	85.7
5	シジュウカラ	87.9	5	カワラヒワ	78.6
6	コゲラ	86.2	5	ヒバリ	78.6
7	ヤマガラ	82.8	7	カクコウ	71.4
8	キジバト	79.3	7	トビ	71.4
9	メジロ	74.1	9	アオサギ、ヒヨドリ、モズ	
10	ヤブサメ	69.0		ホオアカ、ムクドリ	64.3

表 2. 2018年度繁殖期の優占度の上位10種

a) 森林 (n = 58)			b) 草原 (n = 11)		
順位	種名	優占度	順位	種名	優占度
1	ヒヨドリ	16.3	1	スズメ	17.5
2	ウグイス	6.4	2	ニューナイスズメ	8.3
3	シジュウカラ	5.9	3	ツバメ	7.4
4	ヤマガラ	5.0	4	キジバト	6.8
5	メジロ	4.9	5	オオヨシキリ	5.9
6	キビタキ	4.8	6	ホオジロ	5.0
7	ハシブトガラス	3.7	7	ヒバリ	5.0
8	コゲラ	3.5	8	ハシブトガラス	4.7
9	カケス	2.9	9	イワツバメ	4.6
10	キジバト	2.8	10	ノビタキ	4.2

表 3. 5年前(2013年度)の繁殖期の出現率の上位10種

a) 森林 (n = 63)			b) 草原 (n = 12)		
順位	種名	出現率	順位	種名	出現率
1	ウグイス	93.7	1	ウグイス	91.7
1	シジュウカラ	93.7	1	キジバト	91.7
3	コゲラ	90.5	3	ハシブトガラス	83.3
4	ハシブトガラス	87.3	3	ハシボソガラス	83.3
4	ヤマガラ	87.3	3	ヒヨドリ	83.3
6	キビタキ	85.7	6	アオサギ	75.0
6	ヒヨドリ	85.7	6	スズメ	75.0
8	キジバト	76.2	6	ヒバリ	75.0
9	オオルリ	74.6	10	オオヨシキリ、カクコウ	
10	イカル、エナガ			カワラヒワ	
	ツツドリ	65.1		ツバメ	66.7

は年変動し、10位前後を行ったり来たりします。表1、3ではキジバト、メジロ、ヤブサメ、オオルリ、イカル、エナガ、ツツドリ（表の掲載順）がこれにあたります。さらに単年度での上位種の順位の年変動を図1に示しましたのでご覧下さい。この図から、例年どおり今年もウグイスが1位であることが分かります。全体的な傾向は今年の結果も過去の傾向と似ていることが見て取れます。ただし、

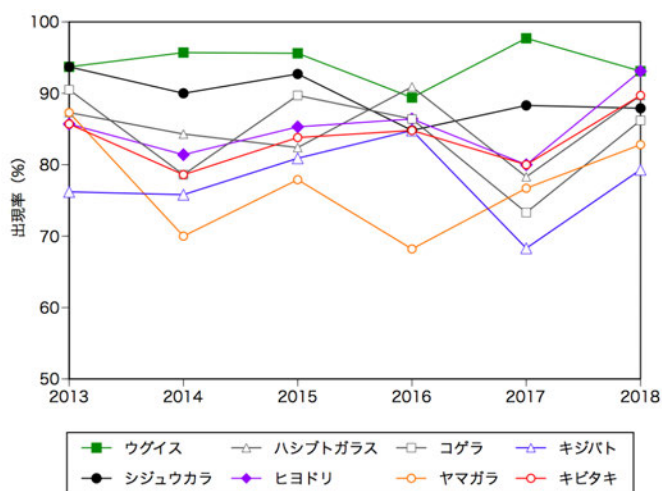


図1. 過去6年間の森林サイトにおける出現率上位種

いくつか変化も感じられます。例えば、キビタキは、年々順位を上げ、今年は昨年に続いて3位になっています。キビタキはモニタリングサイト1000において、もっとも明確に増加傾向が明らかになっている種の1つです。そして今年はヒヨドリが初めて1位になりました。例年は3位か4位であることが多いのですが、昨年の3位からさらに上昇しており、もしかするとヒヨドリは増加傾向にあるのかもしれませんが。体サイズの大きな鳥であるハシブトガラスは、調査範囲に対して行動圏が広いのか、年変化が大きいのですが、概ね横ばいといえそうです。今年の結果を5年前の結果や第2期と見比べても、ほぼ同様の相対順位となっており、これまでどおり上位種の状況に大きな変化がなさそうであることが推察されます。

今回の新たな変化は、ヤブサメのトップ10入りです。ヤブサメが躍進し、この表に登場するのは今回が初めてです。似た事例として昨年はカケスが初めて上位10種に入っていました。このままカケスが上位に定着するのか着目していましたが、今年は再び昨年の順位(18位)並である10~20位の範囲に戻っています。10位前後の出現種であるオオルリやキジバトなどは10位台とトップ10下位グループをいったりきたりしています。何年も調査を継続していると、こうした種がある年にたまたまギリギリ10位以内にランクインするということが起こり得ます。昨年のカケスはそのパターンだった可能性があります。増加傾向にあるのかそうでないのかは、モニタリングの今後の継続的な結果から明らかになってゆくでしょう。これは、ヤブサメでも同様といえましょう。

ヤブサメの出現傾向と多い年の頻度

今回はこのヤブサメの動向に注目して掘り下げてみます。本モニタリングは5年で1期であることから、過去5年分のヤブサメの出現率の順位をさかのぼって調べてみました。すると、24位→16位→20位→18位→10位と年々、順位が上下に振動しながらもジリジリと上昇してきているように見えます。その一方で今年だけのイレギュラーな結果である可能性も充分にありそうです。ヤブサメが増加傾向かどうか悩ましいですね。

偶発的に順位が上昇する、つまり、ある種がた

また多い年がある、という出来事の発生頻度はどの程度なのでしょう。第1期の途中から始まった一般サイトの鳥類調査は、第1期ではラインセンサス法でしたが、第2期からはポイントセンサスに切り替わりました。このため、同じ調査方法(ポイントセンサス)を実施し続けて10年が経過したのが現状です。ここから今の時点ではカケスやヤブサメが上位に入った発生頻度は、10年に1度程度ということになります。もしかしたら10年に1回くらいの頻度でさまざまな種が上位に入ってくる事が偶然(たまたま)起こるのかもしれませんが。他方、そうではなくヤブサメやカケスが増えていく途中過程を、今、私たちは見ているのかもしれませんが。変化の途中にいいのかそうでないのかを判断することは極めて困難です。しかし、長期調査を行い将来に振り返ることで、ヤブサメやカケスの増加だったのかどうかを明らかにすることができます。これもまた“モニタリング”の醍醐味といえましょう。

いかがでしたか。今回は、目の前の出来事が増減という変化の途中なのかそうでないのかの判断の難しさというモニタリングのおもしろい一面をご紹介します。長期のモニタリングを行う意義と、重要性を感じていただければ幸いです。

調査へのご協力ありがとうございました

今回の結果からも、モニタリングサイト1000が推進する長期調査を継続することの有用性の一端を感じていただけたものと思います。毎年の調査結果の積み重ねを前提として、調査設計がなされ、長期的に調査を絶えず継続していくことが重要となることをご理解いただければ幸いです。そのためには、多くの方々のお力添えの結果です。日本の自然環境のモニタリングの実施には、大勢の人々のご協力による調査継続が欠かせません。引き続き、皆様のお力添えをよろしくお願いいたします。

2018年度繁殖期の一般サイト調査には、91名の皆様のご協力をいただきました。最後にお名前を記し、お礼に代えさせていただきます(敬称略、順不同)。

荒井浩、佐々木高寛、田村邦夫、田村元春、中村正男、佐々木伸宏、稲田菊雄、斎藤誠一、寺本明広、今野怜、鷺田善幸、嶋孝弘、石川喜春、関根一広、石井省三、藤島光俊、渡辺正、平野賢次、村井敏郎、増田裕、小笠原正博、吉田良平、多田英行、香西宏明、東條秀徳、高井正明、岩田篤志、水野寛美、矢本賢、渡辺靖夫、岩本富雄、揉井千代子、沼野正博、中井節二、江島浩紀、谷上和年、葉山政治、川島賢治、明日香治彦、篠原盛雄、川崎康弘、今堀英明、中西正和、津田浩、小林繁樹、西尾喜量、満田信也、大島孝之、伊藤恭博、大塚之稔、森眞、山田三夫、渡辺健三、西出隆、三浦憲悦、佐々木均、渡辺央、野中純、高美喜男、原田修、門村徳男、嶋田和明、中西和夫、川合正晃、星英男、斎藤誠一、斎藤充、星野由美子、田中葉子、斎藤敏郎、柳田和美、柳田弘子、今野美和、平野智江、井奥恵三、渡辺貴美恵、荒垣純子、田島奏一朗、鷺田善幸、柴田俊夫、磯海弘子、植阪架愛、奥野俊博、嶋田百合子、大河原吉衛、篠部達也(おさべ)、阿部智、長江卓哉、岩崎健二、古南幸弘、野口真磨子

結果速報

2018年度 コア・準コアサイト鳥類調査 繁殖期結果報告

植田 睦之(バードリサーチ)

2018年の繁殖期は、29の森林サイトで調査を行いました。これまでの記録種数をみると(表1)、多少の増減はあるものの、各サイトにおける毎年の種数は比較的安定していました。ただし、野幌サイトだけは例年よりも種数・バイオマス共に少なく、来年以降どうなるのか、注目したいと思います。

表 1. 2009～2018年繁殖期コア/準コアサイトの確認種数

サイト名	種数									
	2009	10	11	12	13	14	15	16	17	18
足寄	27	33	30	30	34	28	28	28	31	32
雨龍	33	27	36	32	29	25	29	31	26	27
苦小牧	26	28	24	25	29	24	23	29	28	23
カヌマ沢	20	21	24	19	22	24	23	23	21	23
小佐渡	25	32	27	31	27	32	25	28	29	27
小川	30	33	28	27	32	29	29	31	35	26
那須高原	22	24	25	26	33	30	28	28	21	26
大山沢	30	36	32	32	28	31	27	32	32	30
秩父	27	36	29	27	30	29	30	29	25	27
カヤの平	33	38	28	29	31	31	28	31	29	25
おたの申す平	22	23	25	29	27	27	30	20	26	25
愛知赤津	19	20	14	17	22	23	20	17	23	28
芦生	23	19	22	18	22	22	19	26	23	21
上賀茂	25	25	20	22	17	25	17	23	23	24
和歌山	23	22	16	21	21	23	26	19	17	17
市ノ又	24	19	19	23	21	20	20		21	15
綾	20	21	18	22	23	19	18	22	22	15
田野	22		24	23	25	25	18	20	21	23
与那	22		25	20	24	22	24	22	22	22
奄美	16	17	16	17	17	16	20	16	16	17
大雪山		19	18	16	17	16	18	17	17	16
野幌					32					34
大滝沢		31				31	23	27	28	10
早池峰	23				24					24
青葉山		22					25			
金目川		26				24	24	25	27	23
高原山		35					31			
筑波山	27					34				33
西丹沢	28					28				26
富士	24					32				30
関南			30							
御岳濁河		27					27			
木曾赤沢		22					23			
三之公	20				16					18
春日山						24				
大山文珠越			25						24	
半田山			23						31	
臥龍山			15						21	
宮島			23							26
佐田山	21					23				
対馬龍良山				16						18
粕屋				14						21
椎葉		20							23	
屋久島スギ林		26				22				
屋久島照葉樹林				15						13
西表	14									18
小笠原石門	15								14	
			4						6	

林床植生がなくなった丹沢のサイト

近年、シカの影響による藪を利用する鳥の減少が起きています。現在、取りまとめを行なっている第3期調査(2013-17年)の解析報告書の中でも、解析の中心的なテーマの1つとなっています。



図 1. 林床のスズタケがなくなってしまった丹沢サイト。左が2013年の調査サイト。右が2018年

今年5年ぶりに調査された神奈川県丹沢準コアサイトでも、シカの影響および開花による枯死で林床植生が一変してしまっていました(図1)。

ほかのサイトでもこうした変化で藪を利用する鳥が減少していますが、丹沢サイトでも同様のことが起きていました。コルリこそ、まだ普通に声が聞かれましたが、それでも2013年と比べると減少しており、ウグイスやコマドリはほとんど見られなくなりました(図2)。ソウシチョウは記録はされましたが、移動しながら囀っており、定着していない通過個体の可能性が考えられました。

また、ウグイスに托卵するホトギスは今年は1羽も記録されず、宿主の減少が托卵鳥にも影響を与えていると考えられました。大山沢サイトでは、ウグイスやコマドリなどよりやや遅れて、ムシクイ類が減少していましたが、丹沢サイトではムシクイ類に托卵するツツドリも減少の兆候があり、心配されます。今後も引き続き、鳥や植生の変化を見ていきたいと思います。

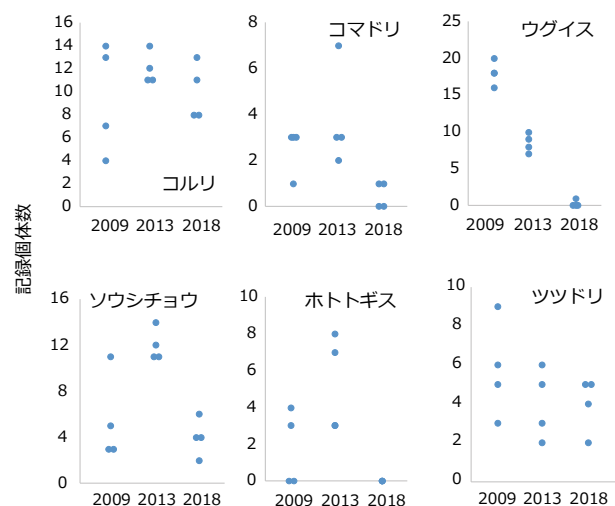


図 2. 丹沢サイトでの2009年からの各種鳥類の記録数の変遷

調査へのご協力ありがとうございました

2018年の現地調査にあたっては、井戸田奈々、岩本富雄、植田睦之、梶田学、加藤貴大、川崎慎二、今野怜、神原貴之、佐々木務、佐藤和人、高美喜男、瀧本宏昭、谷脇智和、知花重治、中村豊、沼野正博、濱田哲暁、平野敏明、外間聡、堀田昌伸、三上かつら、森航大、柳田和美、梁瀬桐子、山崎康一郎、米山富和(敬称略)ほか多くの方々のご協力をいただきました。皆様に感謝いたします。

参考情報

調査中にクマに遭遇しないための心構え

石田 健

今の日本では、クマが身近な動物になっています。私は秩父山地でクマを50個体150回程捕獲して、追跡調査を10年余り実施していました。鳥の調査では、見通しのよい場所で行うことが多く、モニ1000の定点調査も路上で観察することがほとんどなので、クマの出現に対応する必要性が生じることは滅多にありません。それでも、スズメバチやマムシ、ハブ、ツタウルシ等と同様、クマと出くわさないよう注意するに越したことはありません。

ほとんどのクマたちは慎重に人を避け、身を隠しています。足の裏はぼよぼよの肉球で、近くにいてもほとんど音を立てません。私は落ち葉の積もった秋の山奥で、後で実測したら15mまで、背後からツキノワグマが近づいてきていたことに気づかず、カサッと1つ小さな音を立てたので振り返ったことがあります。黒いお尻だけ見せてそのまま、音もなく去って行きました。しかし、ごくごくたまに、無謀な個体もいます。クマも何かに夢中になったり、沢水や葉擦れの音が大きいとき、人がいるとは思わず、油断してうっかり人に近づいてしまうことはあります。お互い不意にばったり

遭ってしまうと、慌ててぶつかったり、転んだりすることはあります。木登りが得意で太く鋭い爪を持ち、とても力持ち、人と似た歯並びながら口は裂けて顎の力も強く、とても素早いので、下手をすると、皮が薄く体格の貧弱な人のほうが大事に至ります。

クマの分布域、クマの出没情報のある時期には、近くにクマがいるものと考え、移動時や調査前は、注意深く見回し、声を出したり大きな音を立てて自分の存在を誇示する心構えは役立ちます。しっかりした靴と皮膚を露出しない丈夫な服装、できればヘルメットや革手袋を着用しましょう。そしていつも落ち着いて、周囲にもよく気を配って調査を行いましょう。

役立つ情報:

環境省「クマに注意 一思わぬ事故をさけよう」

<https://www.env.go.jp/nature/choju/docs/docs5-4a/kids/full.pdf>

知床財団、山中正実氏のヒグマ対応解説

<https://www.shiretoko.or.jp/library/bear/>

日本クマネットワーク(JBN)

日本のクマについて諸情報、報告書のpdfが掲載されている

<http://www.japanbear.org>

石田のクマの古頁(各種リンク)

<http://forester.uf.a.u-tokyo.ac.jp/~ishiken/japanese/kuma/kuma.html>

私の考えるクマとの付き合い方

寺田紋子（日本野鳥の会オホーツク支部）

私が調査を担当する岩尾別台地を含む知床国立公園は、ヒグマの生息地です。幸いにも、調査中にクマに出会ったことはまだありませんが、日々の業務中には何度か(何度?)出会っています。公園内にはいくつかの遊歩道があり、めったにクマと鉢合わせることは無いのですが、ある早春には、細い遊歩道で、行き会ってしまいました。お互いの距離は100mほど、私たちが道を譲ることも可能でした。しかし、ちょうど雪融け時期でとても歩きにくい時でしたので、私はクマと根比べをしてみました。ただ黙って動かず、私がこの道を歩きたいのだと、態度で主張しました。クマもしばらくその場に立ち止まっていたましたが、諦めて、ずぶずぶとぬかる雪のササ藪の中を、私たちから相当な距離を取って、遠回りして行きました。

このような思わぬ遭遇に備えて、私は普段からヒグマの暮らす地域に入る際には、声を出したり手を叩いたりしてこちらの存在を先に知らせるようにしています。そうすれば、クマはヒトに姿を見せることはまずありません。さすがに調査中は静かにしていますが、できるだけ調査地点も見通しの良い場所を選ぶようにすることで、クマに逃げる余裕を与えることができます。一応、クマ撃退スプレーの携行と、本当に襲われた時の防御姿勢も知識としてはありますが、いずれも使い方を間違えればかえって危険ですし、また確実に助かるものでもありません。

その地域に暮らすクマの特性を把握することも大切です。知床には、俗に「新世代ベア」と呼ばれる、ヒトを恐れないう個体があります。早春に出会ったのもそのような個体であつたかもしれません。また、近年は知床に限らず、生ゴミなどを食べて人里の餌の味を覚えてしまったクマもあり、積極的にヒトに近づいて食物を得ようとして危険ですので、こういった個体の情報を得る必要があります。

クマとの出会いは本当に様々で、それぞれに対処の仕方は異なりますが、こちらからは威嚇・攻撃をせず、毅然とした態度でいれば、かなりの確率で事故は防げるのではないかと感じています。クマのような大型の哺乳類が繁殖し、棲み続けられるほど豊かな自然を私たちも享受できることは、本当に誇らしいことだと思います。



親子で日向ぼっこするヒグマ

事務局からのお知らせ

全国鳥類繁殖分布調査

7割の調査が完了しました

植田陸之(バードリサーチ)・葉山政治(日本野鳥の会)

2016年から始まった繁殖分布調査。この3年間で、1,573人の方に調査にご参加いただき、1,637コースの調査をすることができました。まだ全コースの7割程度しか調査できていないので、穴もあるのですが、分布図も、それなりに様になってきました。

水平分布と垂直分布

これまで繁殖分布調査では、日本の鳥の水平分布を描いてきましたが、標高の高いところにいるライチョウやイワヒバリ、低い場所にいるムクドリや水鳥類などといった垂直方向の分布もあります。調査コースの標高はわかっていますので、今回の調査結果から、こうした垂直分布も描くことができます。どんな感じに描けるのか、クロツグミの分布図を描いてみました(図1)。

垂直分布図は調査地の分布を灰色の点で示し、そのうち、クロツグミが記録された場所を黒い点で示しました。表現方法はもう工夫必要かなと思いますが、今までにない情報なので、こんな分布図を全種についてつくってみようと思います。

クロツグミ

- 繁殖を確認
- 繁殖の可能性あり
- 生息を確認
- 記録されたが繁殖はしていないと思われる

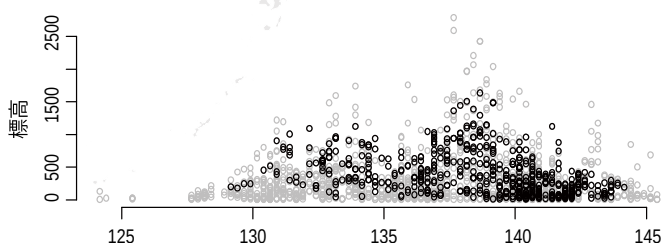


図1 クロツグミの水平分布と垂直分布。垂直分布は調査地の分布を灰色の点で示し、そのうち確認された場所を黒い点で示した。

垂直分布の変化した鳥

これまでの調査結果から、1990年代と比べてガビチョウなどの鳥は急激に分布を拡大していて、ゴイサギなどは逆に縮小していることがわかっています。これらの鳥は水平分布だけでなく、垂直分布も変化しているのでしょうか？

両年代ともに調査をすることのできた調査コースのデータを使って、垂直分布をヒストグラムにして比較してみました。

ガビチョウとソウシチョウについては両種とも特に標高の低い方へと分布を拡げていました。ガビチョウの方が、より標高の低い場所での記録が多いのですが、標高の高い方へも分布を拡大しており、今後の両種の関係(競合するのか、共存するのか)に興味を持たれます。

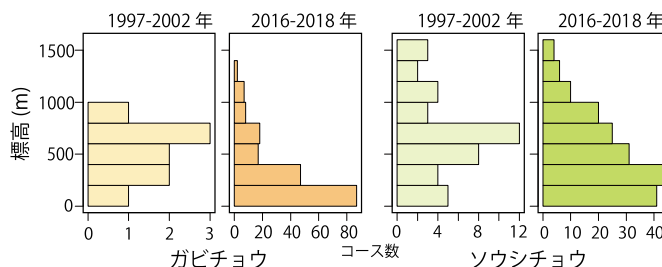


図2 ガビチョウとソウシチョウの垂直分布の変化。1990年代は記録地点数が少なく、今回と横軸のスケールが違うので、標高の高い場所で減っているというわけではない

分布が縮小していたゴイサギは、90年代も今回も垂直分布に変化はなく、全体的に減少しているようです。標高の高い場所に生息していて分布が縮小しているビンズイについては、減少の著しい本州の垂直分布を見てみると標高の低い場所で分布縮小が著しいことが見えてきました。標高の低い場所の生息環境が悪くなってビンズイは減少しているのでしょうか？ そんなことも気になりながら今後の調査結果を見ていきたいと思います。

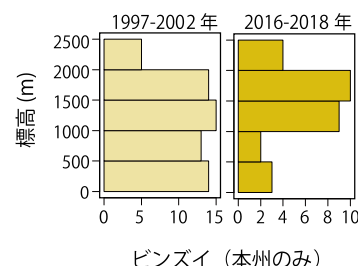


図3 ビンズイの垂直分布の変化。1990年代と比べ標高の低い位置の、記録が激減した。

調査へのご協力をお願いします

たくさんの方のご協力のおかげで以上のようなことが見えてきました。しかしまだ、調査員の決まっていないコースがたくさんある都道府県もあります(表1)。こうした都道府県にお住まいの方にはぜひ調査に参加いただけたら幸いです。また、現地調査だけでなく、アンケート調査で情報を補完していく必要もあります。これ以外の地域の方でもぜひ調査にご参加ください。

調査への参加登録は以下のホームページより行うことができます。登録いただけたら、調査地の情報等お送り致します。調査へのご参加、お待ちしております。

繁殖分布調査のページ: <http://www.bird-atlas.jp/>

表1 調査者の決まっていないコースの多い都道府県

都道府県	調査者の決まっていないコース数
北海道	113
岩手県	25
福島県	19
青森県	16
群馬県	14
福岡県	12

モニタリングサイト1000

研修・交流会レポート

野口真磨子（日本野鳥の会）

研修会を終えて・・・

モニタリングサイト1000の事業は多くの市民調査員のみなさまのご協力によって運営されています。本調査も今年度で16年目を迎え、現在、第3期取りまとめに向けたデータの解析を進めています。モニタリングサイト1000のように大規模かつ長期的な事業を継続していくためには、調査員の確保とモチベーション維持、また調査手法の共有は欠かせないものです。しかし、近年は各地の調査サイトで調査員の高齢化や後継者不足が課題となっています。

この課題を解決するために、次世代の調査員の確保と調査員同士の交流・情報交換の場となることを目的に、研修会を毎年全国各地で開催しています。2018年度は鹿児島県、京都府、東京都の3か所で開催しました。今回の研修会は、モニタリングサイト1000の事業内容や調査方法を学んでいただくとともに、参加者の方に日頃の活動を紹介していただく時間を設けました。また、これまでは参加者同士が気軽に話せる時間が無かったので、交流タイムを確保、調査への参加に対する率直な意見から普段の鳥に対する疑問まで幅広く話し合いました。鹿児島会場では、野鳥の鳴き声を録音している永正さんから、録音方法などについてお話し頂きました。京都会場では、副島さんには、長年の桂川の鳥類の変化に関する発表を、黒田さんには独自に調査をされているハリオアマツバメに関する発表をして頂きました。長年にわたる貴重なデータの蓄積から見



東京会場での調査実習の様子

えてくる近年の鳥事情など、とても興味深いお話しばかりでした。東京会場では、自身で得たデータを登録しておける「さえずりナビ」というサイトの紹介を行いました。ご自身のデータを簡単にネット上に登録でき、エクセル形式などでダウンロードも出来るこのサイトに、みなさん興味深々でした。

今年の研修会後はうれしいことに、その場で現在調査員が少なくなっているサイトの調査を引き受けてくださる方がいらっしやいました。また、今年事務局が実施している調査サイトの越冬期調査に、鹿児島大学野鳥研究会の皆さんが参加してくれました。5年に1回の本調査（一般サイト）は、4年で卒業してしまう大学サークルの学生の皆さんが特定のサイトを担当して頂いている事例はまだありません。ですが、今回の調査をきっかけに興味を持つ学生の方が増え、将来調査者として協力してくれるのではと期待が膨らみました。今後も全国各地で研修会を開催していきたいと思っておりますので、ご希望がありましたら事務局までご連絡ください。よろしくお願い致します。

ガンカモ類、シギ・チドリ調査との合同講習会を開催

長期的な調査体制を構築するためには、分野間の協同も必要ではないかということで、以下の通り、陸生鳥類調査、ガンカモ類調査、シギ・チドリ調査の合同の講習会を開催することになりました。ご興味のある方は、ぜひご参加ください。

千葉県船橋市	2019年2月24日 10:30-16:30（室内講義とシギチドリ調査実習） ふなばし三番瀬環境学習館 多目的スペース
宮城県仙台市	2019年3月2日 13:00-17:00（室内講義） スペースユース仙台あおば通店 5階B会議室 2019年3月3日 9:30-12:00（陸生鳥類調査実習） 青葉山公園
大阪府大阪市	2019年3月9日 9:30-16:00（室内講義とガンカモ調査実習） 大阪府立男女共同参画・青少年センター大会議室
条件	どなたでも参加いただけます。参加費は無料です。 プログラムの詳細は以下のHPをご覧ください。参加申し込みをしてください。 http://www.bird-research.jp/1_event/moni.html